

## 研究発表

### 藤原定家と新古今時代歌論の諸問題

Fujiwara Teika and some problems of  
*shinkokin* period poetics

ROBERT BROWER\*

For complex reasons--artistic, social, political biographical--Fujiwara Teika (1162-1241) came to occupy a unique position as Japan's pre-eminent authority on classical *waka*. His reputation was built upon the high quality of his own verse, his influence as a teacher of poetry to others, and his particular literary ideals and tastes. His ideals and tastes are expressed implicitly in his poetry and in the anthologies of the poems of others which he compiled, and explicitly in his treatises and critical statements.

To the modern student, raised in the shadow of Romantic expressive-objective theories of poetry, Teika's pragmatic emphasis in such treatises as *Kindai Shūka*, *Eiga no Taigai*, and *Maigetsushō* may seem to slight the rôle of inspiration and innate poetic feeling in the creative process. Such a judgment must be modified, however, in the light of the record of Teika's poetic accomplishment and his development as an artist. The Western student in particular must investigate not only the treatises but

---

\* ROBERT BROWER [現職] ミシガン大学教授

also the poems that Teika composed and the poems of others that he seems to have esteemed. The poetic treatises are of course extremely important--the *Maigetsushō*, for example, is the *locus classicus* of Teika's dominant aesthetic ideal of *ushin*, or "intense feeling." At the same time, the concerns and preoccupations of the treatises must be interpreted Teika and *Shinkokin* Poetics in the light of the specific circumstances of their composition and the audience to whom they were addressed.

It is perhaps true that on balance Teika's critical preoccupation was more with the pragmatic-prescriptive aspect of composition than with the abstract-idealistic nature of the creative act. However, such a preoccupation was inevitable in view of his rôle as a teacher of poetry to others, and is not evidence of a lack of poetic temperament in Teika himself. On the other hand, in the generations that followed Teika, an overemphasis upon pragmatic-prescriptive concerns led to an undervaluation of originality and inspiration in a predominantly conservative and conventional poetic tradition.

新古今時代と申しますのは、広い意味では12世紀後半より13世紀前半までの1世紀にわたる時期であると思いますが、この時代は、私の考えでは日本の宮廷和歌は最頂点に達した時代です。その時代には優秀な歌人、数十人が次から次へと現われ、互いに競争したり影響したりして非常に興味ある、そして価値ある時代を築いたと思います。

その時代、新古今時代という日本の宮廷和歌が最頂点に達した時代を代表する歌人は、藤原俊成、定家父子という2人の偉大な歌人であると思います。

俊成は1114年から1204年までの大変長い生涯を終え、90才まで生きた例外的な存在であって、彼は歌合せの判者、『千載集』の選者、余情、幽玄美の創作者、唱導者であるばかりでなく、いろいろな方面で歌道的に活躍した人物で大変尊敬すべき歌人ないし批評家であると遍く認められているのであります。定家も1162年から1241年まで79才の生涯を終えた人で偉大な歌人であるばかりでなく、『新古今集』の選者、『新勅撰集』の選者それから余情、妖艶美の創作者、唱導者、新古今時代の歌人の指導者であります。そして後代に及ぼした影響は、子孫が二条、京極、冷泉という三つの派に分かれまして、いずれも、多大なものであったということは、誰もが知っていることだと思います。

俊成、定家の一生涯の目的を簡単に言わせていただきますと、その当時の和歌の状態、和歌の基準をなるべく高い水準に持ち上げようとするものであります。俊成の言葉ですが、いわゆるスローガンは「言葉古く心新し」というのが最も有名なものですが、定家はその理想を受け継いで自分なりに発展させ明確にした形跡があると思います。こういう「言葉古く心新し」というスローガンが象徴する時代は、ネオクラシック、すなわち新古典主義の時代であったことを意味すると思います。

西洋の英文学史に照らしてみると最も類似している時代としては17世紀から18世紀初めにかけての1世紀位のネオクラシック・エイジだと思います。その時代においては古代ギリシャとローマの文化や文学が理想的と思われていました。そして詩論の上ではアリストテレス、プラトン、フォラシオの影響を受け、模倣、誤解までも行われていた時代です。いわゆるオーガスタンエイジと言われ、ドライデン・ポープ・ジョンソンというような偉大な詩人兼詩論者が活躍した時代です。

日本でもネオクラシック・エイジ、新古今時代は西洋と同じように古代を理想的に見ていた時代であります。日本では平安時代全盛期への憧れ、延喜、天暦がその理想的な時代であり、12世紀の終りにもその時代を再生しよ

うという努力が和歌の基準になっていたと思います。その一つの象徴としては『新古今集』、新しき『古今集』という名称が非常に意味あるものだと思います。しかし、日本人の学者にあまり研究されていないものがあると思います。それは、平安朝前期の三大集時代、延喜、天曆を理想的に見ただけでなく中国の影響もかなりあると思います。中国晩唐の詩の影響は、同時代の歌人によって、一般的な文学の理想としても非常に意義ある役割を果たしていたと思います。この点については研究する余地があると思います。

中世の新古今時代、ネオクラシック時代と、西洋のイギリスにおけるオーガスタン時代は共通点が多くあると思いますが、特に文学論について極端に言えば非常に規定的であったと言えます。西洋では実用的な関心（理念）は文学の効果に関する関心から出たことであると思われ、文学作品としてはアリストテレス、プラトン、フォラシオの詩論から伝わったものであると思います。アリストテレスを誤解することはその時代には多く行われていたことで、そういう誤解は大変つまらない結果になってしまいました。一例としては、演劇上の統一論という無理な極端なところまで発達してしまったのですが、これを粉碎したのは17世紀の批評家として高い位置を占めているサミュエル・ジョンソンの考えです。ジョンソンはいわゆるリーズン（道理）とコモモンセンス（常識）という基準で、極端に走っていた余りに規制的な詩論を打ち破ろうとしました。そして、18世紀の終り頃になるとローマン主義という運動が始まりました。これはネオクラシックの種々の規則や基準に対する極端な反感を現わす運動であったと思います。我々は現代でもネオクラシックに対する反感が残っており、文学を見る時にはそのような態度に影響されると思います。

新古今時代に戻りますと、俊成も定家も批評家として、判者として知られていましたが、俊成は歌合せの判詞として最も活躍しました。勿論、忘れてはいけないのは晩年に書かれた『古来風躰抄』という歌論書があることです。俊成の歌合せの判詞もしくは『古来風躰抄』を読んでどこに焦点があるかと

言いますと、その当時の和歌の基準をなるべく高いレベルに持ち上げようという努力であると思います。その当時の和歌は分裂状態にあったので、それを統一させてプロフェッショナルな、そして非常に真面目な態度で高い水準に持ち上げようとする努力が定家、俊成二人の一生涯の努力であったと思います。それには仏教の修業、努力、道の観念がかなり深い意味を持つと思います。それは当時の一般貴族の間で行われていた考え、和歌というのは弄びであるという軽い態度と比較すべきであると思います。

定家の歌論書に移りますと、種々の問題が残っていますが簡単にリストしますと『近代秀歌』『詠歌大概』『毎月抄』があります。その他にもいくつかの作品があります。『定家十躰』『秀歌大躰』『百人秀歌』『八代集秀逸』『百人一首』です。このような物は、定家のもっと広い範囲の歌集である『八代集』あるいは『二四代集』から材料を取って適当に選ばれたものです。これらの信憑性、確実性についてはかなり問題が残っていると思いますが私の印象を述べます。これらの歌学書、『近代秀歌』『詠歌大概』『毎月抄』は別として、その他の『定家十躰』はどのようなものであるかと言うと、単なる歌の集です。このことは私たち西洋人の目から見ると大変意外なものであると思います。『定家十躰』は286首から成る、いわゆる秀歌例集です。秀歌例集というのは、優れた歌、例にすべき歌の収集であるという意味です。『秀歌大躰』も同じように112首の秀歌例集であり、『百人秀歌』も同じく101首の秀歌例集、『八代集秀逸』も80首の秀歌例集、『百人一首』は最も有名なものですが、これも100首から成る秀歌例集です。これらを歌論書、歌学書というと、西洋人はこんなものが歌論書であるかと大変絶望的な印象を受けると思います。

どうしてこのような物を歌論書または歌学書というのか。これは日本人にとっては言うまでもなく明らかなことですが、西洋人にとっては非常に説明を要するものであると思います。日本の中世において歌道、和歌を習う場合、一番大事にしているのは歌の収集、秀歌例をモデルにしてそれを真似ることでした。それは一種の教科書と認めて良いと思います。日本の歌論において

は、西洋のような大規模な哲学的、文学的、抽象的な文学論という伝統がないと言って良いと思います。そして、俊成や定家、特に定家は文学論、特に歌論を書きまとめて一つの歌論書にするということを非常に嫌っていたと思います。むしろ、定家が自分の好きなようにさせてもらったとするなら、沈黙を守ったと思います。その例外が『近代秀歌』『詠歌大概』『毎月抄』というものです。

『近代秀歌』『詠歌大概』はごく短いもので序文的な歌論がありますが、一番歌論としてまとめたものは『毎月抄』だと思います。現在私は『毎月抄』を英訳しようとしているのですが、英訳している間に非常に優れた歌論であると感じました。『毎月抄』はいくつかの部分から成るものですが、その一部に触れたいと思います。この一番中心となる重要な点は有心体というものです。そしてもう一つ、秀逸体という定義であると思います。秀逸体の定義は次の部分です。

その哥はまづ心ふかくたけたかくたくみに、ことばの外まであまれるやうにて姿けだかく、詞なべてつゞけがたきが、しかもやすらかにきこゆるやうにてをもしろく、かすかなる景趣たちそひて、面影たゞならず、けしきはさるから、心もそゞろかぬ哥にて侍り。

It is full of poetic feeling, lofty in cadence, skillful, with resonances above and beyond the words themselves, dignified in effect, its phrasing original yet smooth and gentle, interesting, suffused with an atmosphere subtle yet clear, richly evocative, its emotion not tense and nervous but conveyed by the appropriateness of the imagery.

このような秀逸体の定義は大変な注文だと思います。『毎月抄』はある人に宛てた書簡の形をとっているのですが、定家がいかに和歌の基準を高い水準に持ち上げようとしているかを表すのにふさわしい象徴であると思います。

最後に申しますが遺憾ながらも定家の子孫、特に有力方になった二條派の歌人達が彼の理想的考えを無視して、彼の規定的、規則的な心得に重点を置

き過ぎて、愈々保守的、模倣的にならざるを得なかったのであります。これと同じような経過は西洋のネオクラシック・エイジの行き詰まりをもたらしたと思われるのであります。

## 討議要旨

西勝氏から本歌取りはクリエイティブでオリジナリティを持ちえているか、また短詩型文学は一句、一首それ自体で自立し得るものか、との質問があった。発表者から西洋でも本歌取りのような詩が沢山あるし立派な詩も沢山ある。また短詩型の文学でも自立性は充分認められる。宣長の歌などでも一首のみで見事に世界を現したのものがある。要はその詩人の力量であるとの返答があり、加えて、日本の研究者はともすると歌句と歌人俳人との実生活とを結びつけて解釈しようとする空気が濃厚であるとのコメントがあった。

久保田淳氏から、発表者が詩歌と実生活を日本の研究者が結びつけすぎるとコメントされたことに同意する。また発表の中にもあったが、俊成や定家には哲学的、抽象的な思考はなかった。従って彼らは歌論書を書くことを良しとは思わなかったろう。それから考えると歌論を論じる時、研究者が反省すべきことがらが含まれている。つまり歌論書であるからと、そこに論理構造があると考え決めてかかることは要注意であろう。もっと秀歌例の意味を考えることが必要だろう。また発表にあった『定家十躰』の作者については研究者の間で定家真筆、贋筆両説があるのでいずれかの機会にそのことについてふれてもらいたい、とのコメントがあった。